

水産物市場・流通の構造変化と今後の課題

食料・環境領域 主任研究官 高橋祐一郎

講師：三重大学大学院生物資源学研究科 准教授 松井隆宏氏

日時：平成27年10月23日（金） 13時30分～15時

場所：農林水産政策研究所セミナー室

漁業によって生産される水産物の多くは、漁港や市場の処理能力や消費者の需要に合わせて計画的に操業することや生産量を調整していくことが困難な特性があります。また、農産物に比べて鮮度が重視されることから、生産地から消費地までの迅速な輸送が要求されます。このため、水産物の生産地価格は、水産種、品質、漁獲量によって決められるのではなく、資源動向、燃油価格、漁場や市場の処理能力、輸送コストなど、様々な要因によって常に変動しています。

一方、水産物の消費地価格は、品質や季節による消費者の値ごろ感が重視されるため、商品の種類によって価格帯が決められ、必ずしも水産物の生産量や生産地価格の動向に依存しない傾向がみられます。

このため、生産者は、高品質であり、消費者の需要も高い水産物を生産したとしても、適正なマージンを得られないことがあります。例えば、ごく少量の漁獲であった場合や、流通体制が構築されていない漁港に水揚げした場合は、保管コストや輸送コストの面から、生産地価格が低く抑えられてしまうことがあります。また、大量に漁獲された場合には、肥料料仕向け並みの安い価格で取り引きされてしまうことや、投じた労力に見合った経費さえ確保できないこともあります。こうした現象は、国産水産物の健全な流通促進の上でも解消する必要があります、有

限である水産物ごとの資源動向を見据え、経営・経済的な分析を行いながら、消費者の選好を的確に把握し、サプライチェーン全体の構造改善を検討していくことが求められています。

今回、水産経済学を専門とされ、漁業・水産業の価格

形成や、市場・流通構造に関する多くの研究成果を発表されている三重大学の松井准教授を講師としてお迎えし、水産物市場・流通の課題に関するセミナーを行いましたので、報告します。

講演では、まず、水産物の価格構造を示された上で、水産物流通は他の第一次産業に比べて非効率と言われ、資源配分の無駄により、健全な「競争」が行われていない可能性があり、この点を検証する必要があることが指摘されました。一方、水産物では、コストに関する統計資料が不足しており、実証分析が簡単ではないことから、代替的なモデル分析の適用が必要であると述べられました。

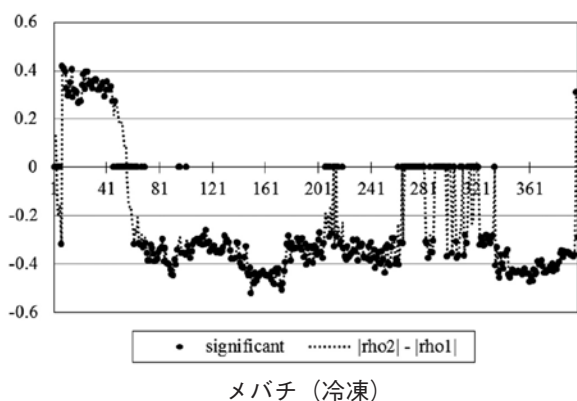
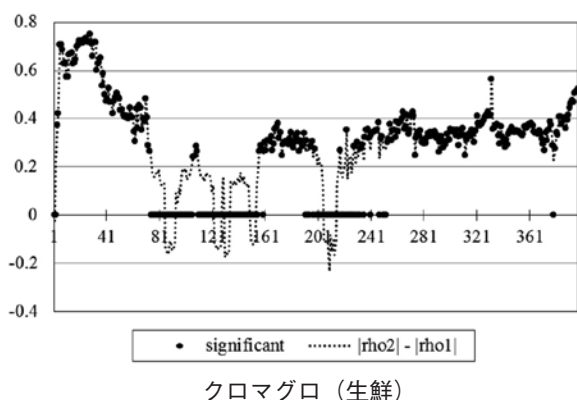
また、いくつかの水産物流通においては、投入価格（生産地価格）が上昇した場合と下落した場合とで、産出価格（消費地価格）の調整速度が異なる「非対称価格伝達（APT）」が起きていることを指摘し、生産地価格が上昇した場合には消費地価格への反映が早い、下落した場合には反映が遅いという非対称性が存在すれば、生産者・中間流通業者側（川上側）に価格支配力があり、この逆の非対称性が存在すれば小売側（川下側）に価格支配力があることを示されました。この価格支配力の有無を統計的に検証し、結果をグラフ等で可視化できる手法として、モデル分析の一つである M-TAR モデルを紹介されました。

さらに、水産物流通は、かつては零細な漁業生産者と生業的な小売業者を結びつける役割として、卸売市場など中間業者の役割が重要だったが、現在では、大手水産会社の商社化、スーパーマーケットや外食産業のマーケット・パワーが増加したこと、漁業生産者の組織化が進んだことなど、近年の流通構造の変化を挙げ、このことが非対称価格伝達を生み出す一因となっている可能性があることを指摘されました。



松井隆宏氏

次いで、主な水産種に対する M-TAR モデル分析の結果が示されました。まず、寿司のネタとして知られる生鮮クロマグロに対してモデル分析を行った結果、1960 年代から現在に至るまで、川上側に価格支配力があることが見出されました。この理由として、生鮮クロマグロは、寿司店などの小規模な外食店にとって欠かせない食材であり、価格にかかわらず買い控えられないのではないかと考察を示されました。一方、同じマグロ類でも、刺身盛り合わせに入れられることの多い冷凍メバチに対するモデル分析の結果では、川下側に価格支配力があることが見出されました。この理由として、刺身盛り合わせは、様々な水産物の組み合わせが可能であり、冷凍メバチの供給量が不足しても、他の水産物で代替されてしまうのではないかと考察を示されました。



加えて、マイワシ、マアジ、スルメイカ、カツオ、サンマ、マダイに対するモデル分析の結果が示されました。サンマは、生鮮クロマグロと同様、川上側に価格支配力があることが見出され、この理由として、漁期である秋にサンマを食べたいと季節性を重視する消費者が多いことで、小売店は多少高価になっても仕入れて販売しようとするのではないかと考察を示されました。一方、マイワシ、カツオ、マダイは川下側に価格支配力があることが見出されました。また、マアジとスルメイカについては、い

ずれの側にも価格支配力が見出されなかったことから、サプライチェーン間で公平な取引が行われている可能性を示されました。ただし、スルメイカについて、冷凍、開き干し、煮イカといった商品形態別にモデル分析を行ったところ、冷凍<開き干し<煮イカの順に川上側に価格支配力が高まるが見出され、加工の度合いが大きくなるほど川上側が有利になるのではないかと考察を示されました。

まとめとして、このモデル分析の結果から、水産物の価格支配力が川上側から川下側に推移しているという、水産物の市場・流通構造の変化が実証的に示されたと述べられました。ただし、水産種や商品形態ごとに大きな違いがあるため、流通問題の解決策の提示にあたっては、個別の議論が必要であることも指摘されました。また、代替財が存在する水産物は、川下側が有利になる傾向があることを示されました。さらに、同じ水産物であっても、加工により商品価値が向上するなど、商品としての差別化が図られれば、川上側有利の状況が形成される可能性があるとして述べられました。

しかし、今後の研究の発展にあたっては、現状でもデータの種類が少ないところ、近年、水産業に関する統計項目が削減されてしまっている状況であるため、直接、各種のコストに関するデータを扱える立場の方に期待したい、との要望もなされました。

なお、本セミナーに対する関心は高く、行政、水産業、食品産業、大学、貿易業、マスメディアなど様々な立場の方が参加し、会場はほぼ満室となる盛況でした。講演後の質問も多数あり、セミナー終了後も松井准教授に質問したい来場者が列をなす状況でした。また、セミナーの概要については、水産経済新聞（平成 27 年 10 月 27 日付け、3 面）、みなと新聞（平成 27 年 10 月 27 日付け、7 面）に掲載されるなど、大きな反響がありました。

松井准教授によって示されたモデル分析は、水産物市場・流通に関する課題を可視化できるものであり、水産サプライチェーンの関係者間の合意形成だけでなく、水産物の供給・需要と価格の関係について、消費者との相互理解を深められるツールとしても有効と思われます。

注. セミナーの資料は、下記の農林水産政策研究所ホームページでご覧になれます。

http://www.maff.go.jp/primaff/meeting/kaisai/2015/pdf/20151023_01.pdf